



特集記事 | Feature Article

太陽光発電施設建設に対する北杜市大泉町泉原地区の対応

Dealing with Emerged Challenges by the PV Facility-Sitings:

Two cases in Izumihara district, Oizumi, Hokuto, Yamanashi Prefecture

牧野 州哲（太陽光発電を考える市民ネットワーク・共同代表）

Kunitetsu MAKINO Joint Representative, Citizen's Group for Nature-Friendly Solar Panel Settings (CGNFS)

著者紹介

著者の牧野氏は1948年生まれ。2008年に北杜市大泉町に別荘を建設され、その後、川崎市と北杜市での2拠点居住で生活されてきた方である。2014年3月、W社が別荘近隣の森林を伐採して太陽光発電施設を建設、これをきっかけに氏は近隣の住民有志と「大泉の自然と景観を守る会」を結成され、問題の渦中に身を置くことになった。同会は、やがて2015年1月に結成された「太陽光発電を考える市民ネットワーク」のひとつの母体となっていく。ご自身の立場から「市民ネットワーク」設立に至るまでの一連の前史を概観なさった本稿は、当事者によるオーラル・ヒストリーとしてこの上ない価値があるだろう。依頼をご快諾いただき、ご寄稿くださったことに心より感謝申し上げたい。

（鈴木晃志郎）



写真1. 北杜市大泉町一泉原地区

（筆者撮影）

北杜市大泉町の泉原地区は、八ヶ岳南麓尾根上の標高1,100～1,300mほどのところに位置し、四季折々の美しい自然や景観に囲まれ、その中に100軒ほどの住居や別荘が点在している地区です（写真1）。

2014年の早春、森林伐採をきっかけに、泉原地



写真2. L社による森林伐採現場

（筆者撮影）

区の2か所で太陽光発電施設の建設計画があることが判明しました。一つは住居や別荘に囲まれた約2,000㎡の林を伐採した敷地（W社）に、もう一つは八ヶ岳南麓尾根筋の急斜面の約35,000㎡の森林伐採現場（L社）にメガソーラーを建設するという計画でした（写真2）。

泉原地区に住む多くの人達は、再生可能エネルギーの普及には賛同するものの、同時に自然豊かな住環境に癒しを求めてこの地に住まいを定めた経緯があり、その設置には自然環境への配慮や周囲の景観とのバランスが大切であると考えました。長年の時を経て育まれた自然を一瞬のうちに壊し、無機質な大型パネルが並ぶ風景はまるで都会のビルの林立を想起させるものです。更に再生に膨大な時間を要する森林を伐採することは、山の生態系の破壊、大泉の誇る湧水の枯渇、昨今頻発する異常気象による土砂災害などの危険につながります。

問題は泉原地区にとどまらず、代々この地区の下流域に住む地元の人達も土砂災害や水源の枯渇に関して大きな懸念を示しました。

北杜市は、2011年に「北杜市景観条例」を制定しています。しかし、この景観条例には太陽光発電施設の設置に関する規制は無く、この問題が発生した段階では、太陽光発電施設の建設は野放し状態で有効な規制方策はありませんでした。私たちは、2014年3月、W社の建設現場の近隣住民有志により「大泉の自然と景観を守る会」を発足させ、北杜市や山梨県に対して景観や自然環境保全の観点から何らかのルールを策定するよう働きかけを行いました。行政を通じた有効な解決策は見いだせませんでした。この頃、北杜市の他の地域においても、あちらこちらの林や森林が伐採され次々に太陽光発電施設が建設され始めていました。私たちは、北杜市の人達に現状を知ってもらうとともに、行政には太陽光発電施設の設置に対する何らかのルールを作るようチラシなどを作成し訴えかけを始めました。

同時に私たちは、地主や事業者に対して、この地での太陽光発電施設の建設に対する問題点を訴え建設を思いとどまるよう話し合いをしました。特に、W社の場合は、地主の事情を付度して、代案として建設予定地を市民農園として利用する案や、隣接する空家を借家として貸し出す案などを



写真3. W社の太陽光発電施設

(筆者撮影)

提案しました。しかし、これらの提案は地主や事業者には受け入れられず、W社の太陽光発電施設は建設されました(写真3)。しかしこの間、住民と事業者間の話し合いによって、施設の柵の色を目立たないものにすることや施設の周囲には常緑低木による植栽をすることなどを建設の条件として認めてもらいました。

泉原地区における更に大きな課題は、太陽光発電施設がこの一か所にとどまらず(当時W社は建設現場の直ぐ近くで第2の建設計画があることを表明していました)、これを機に泉原地区のあちらこちらで施設が次々に建設されることに対する懸念でした。

太陽光発電施設の建設に関する法的規制が無く、行政の対応が全く当てにならない状況で、自らの力で泉原地区の自然や環境保全のためにはどうしたらよいかを模索する中、北杜市の他地区でその地区の環境保全のために、地区住民が「住民協定」(あるいは「自主協定」と呼ばれる住民間ルールを作っている(目的は太陽光発電施設の建設に対処するものではない)ところがあることを知りました。

そこで「大泉の自然と景観を守る会」では、これを参考にして、“泉原地区における太陽光発電施設の建設、及び、地区の景観と環境保全に関する住民間ルール”の検討を行いました。そして泉原

住民自らが、泉原地区の自然環境と景観を守り将来へとつなげていくために、「北杜市景観条例」の趣旨を一步踏み込んで理解し、率先して住環境保護のルールを作り・守っていこうという趣旨で、住民協定として「泉原環境保全地区宣言」を作成しました。

ここではこの地区の環境保全に関するガイドラインとして：

◇「北杜市景観条例」の理念である“愛着と誇りの持てる景観を将来にわたって継承する”ことに賛同し、この地区の美しい景観の保全と育成に努めること

◇太陽光発電設備の設置に関しては、自宅の屋根に設置することと、景観保護の観点から地上設置は行わないこと

◇そしてこの地区の自然と景観の保全と育成に努め、ここに集う人々が心豊かに楽しく住まうことのできる地区作りを目指すこと

・・・を謳っています。

「大泉の自然と景観を守る会」は、泉原地区の全ての住民に対して、この住民協定への賛同を得るための署名活動を行い、第1段階で全戸数の2/3を超える方たちからの賛同を得ることができました。残りの1/3の方たちの多くは別荘所有者で、連絡を取ることができなかつた方が多く、署名に協力をいただけなかつた方はわずかでした。

2014年9月、「大泉の自然と景観を考える会」は、この住民協定の署名簿を北杜市役所に届け出ました。届け出を受けて北杜市役所は、太陽光発電施設建設、及び環境保全活動に関する泉原地区の住民の考えとして、これを太陽光発電関連の事業者にも周知することに同意しました。この住民協

定は、法的規制力はありませんが、その地区に住む住民の意思表示としての抑止力、及び、新たな課題が発生した場合の住民相互の団結力を示すものと位置付けています。

現時点（2015年10月）で、W社は泉原地区における第2の施設の建設を断念しています。またL社は森林伐採後工事に着手していません。今後、新たな施設の建設計画が持ち上がることも考えられますが、その際には、この住民協定のもと泉原住民の総力を挙げて対応策を検討していきたいと考えています。

私たちは、太陽光発電施設の建設問題と住民協定の作成過程を通じて、それまでは概して近隣付き合い合いが希薄であった泉原地区内で新たに様々な人々の繋がりが生まれたことが一番大切な成果であったと考えています。今後は、この繋がりを活かして、もう一つの目標である泉原地区の自然や環境保全の活動に結び付けていきたいと考えています。

その後「大泉の自然と景観を考える会」のメンバーの多くは、2015年1月に結成された「太陽光発電を考える市民ネットワーク」の一員として、北杜市の太陽光発電施設建設の条例化を求めるための様々な活動に取り組んでいます。また他の地区で太陽光発電施設建設に関する問題が起こった際には、その近隣の住民自らがそれぞれの地区に則した対処方法を模索する際の参考にしていただけるよう、泉原地区での経験を伝える助言活動などを行っています。

（投稿：2015年10月24日）

（受理：2015年11月24日）